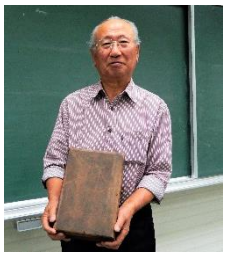
郷土史 ていね

第 139 号
令和 元年 7 月 10 日
手稲郷土史研究会 会報

［令和元年6月12日 定例会発表要旨］

脈々伝わる明治人の気迫～139 年前の古文書から

手稲郷土史研究会 会員（相談役） 一ノ宮 博 昭



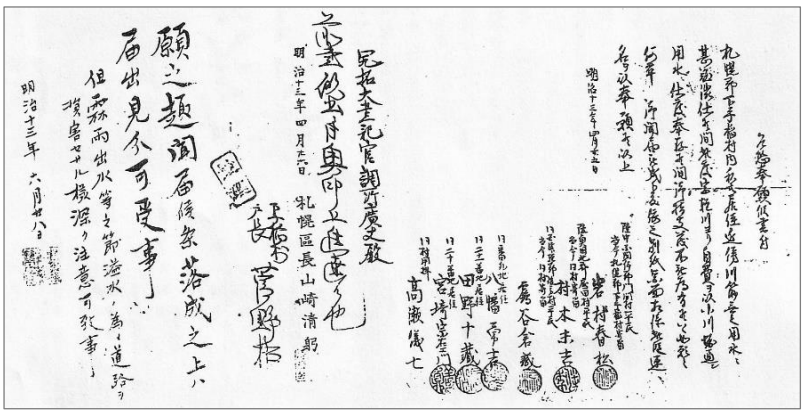
宮崎家に保存されていた木箱

拙宅の隣に、稲穂入植５代目になる宮崎家（宮崎貞子さん）がある。20 年ほど前のこと、古い物置を解体、撤去しようとしたところ、妙な木箱が出てきた。木箱には「稲穂神社書類入」とある。ふたを開けてまず目についたのが「前ノ河御指令書入」という半紙２枚を コヨリで綴じた毛筆の書類。地元の稲穂金山活性化推進委員会で何とか解読しようと取り組んだのだが、とても手に負えそうになかった。そこへ登場したのが、元 稲穂連合町内会長で 元 道職員の福岡芳香 氏（獣医師／故人）。文書を見るなり、「さほど難しい言い回しはない」と、あっさり読んでくれた。表題は「乍恐奉願候書付」（恐れながら願いたてまつりそうろう書きつけ）というもので、簡単にいえば、生活用水や耕作のための小川を自費で掘削するので 許可願いたいという、道（開拓使）に対する請願書。原本は下図のとおりだが、わずか２枚の半紙なのに、その内容には驚くばかりの記述が随所にある。

まず、手稲村戸長 菅野格 が 札幌区長 山崎清躬 宛に提出したのは 明治 13 年 4 月 25 日となっている。が、札幌区役所は その翌日、明治 13 年 4 月 26 日には開拓使に転送し、開拓大書記官 調所広丈にあて「前書願出月奥印の上進達候なり」。そして、わずか２か月経過した６月 28 日には「願之趣聞届候」（願いのおもむき 聞き届けそうろう）と朱書きの毛筆で決済されていることだ。当時、開拓使には道内各所から請願、嘆願が山のように届いていたはずだが、調所広丈 が直接決済したものでないまでも、その取り組む姿勢に、現代では考えられない ものすごいバイタリティを感ずる。

元 稲穂連合町内会長の鑑定

福岡氏によれば、この用水路掘削に係る文書は地域の住民が起案したものでなく、役所の機構に通じた者が書いており、おそらく連名末尾に登場する村用掛 高瀬儀七 の起案でないかと推測する。書式についても、用件の次に「何卒」と改行して書き、さらに一文字開けて「御聞き届けなしくだされたく」と続ける敬意文体を知っている人の筆だと 指摘していた。また、文書には 黒い角印で「地理」と読める押印があり、担当掛の印でないかという。かすかながらB4 の紙の上部に契り印もあり、本物の書類とみて間違いないとの鑑定結果を得た。



用水路掘削を請願する宮崎家の古文書

ところで、一ノ宮家の手稲墓苑の墓には、大小４基の墓標があり、請願書の筆頭署名者の 岩村春松 の名前もあった。幼少の頃、私は「この墓は誰だ？」と聞いたことがある。

だが、母親は「ウチにとって大事な人と ばあちゃん が言っていた」と言うだけで要領を得なかった。後日、調べた結果、一ノ宮の２代目 米松の妻をアキといい、春松が養父だったことがわかり、我が家のなにかにつけて 役場や寺を訪れて手続きしていたことがわかった。当時、墓標は土葬が主流だったため、４基すべてが傾いてしまい、改装した折り すべてを土台に埋め込んだ。当時、一ノ宮はまだ地域の相談に乗れるほどの立場になかったということだろう。青森、岩手県庁にも協力を求めたが、岩村春松の出身地は特定できたものの、その末裔がどうなっているかまでは特定できなかった。

手掘りの小川 ルート（平成10年当時の地図）

現況の小川は荒れ放題

さて、問題の小川だが、稲穂２条１丁目 2-3、同 2-5 の民家の間を流れくだり、軽川からの分水地は高速道路のやや下、手稲本町５条２丁目 10「ていねあすか公園」付近にある。当初は大きな石を積み上げて流れを変えていたが、のちにコンクリート製の水門が設置されている。しかし、この水門が機能していたかまでは私も覚えていない。開削の始まりは 建設機械など一切ない明治時代。スコップ、ツルハシだけの工事で、住民にとっては大変な難事業だったろう。ゆえに保全にも高い関心を寄せ、年に一度の川掃除の日は住民総出の作業となった。このルートだが、国道の下をくぐり、やや東よりに上り、稲積川と結んだ。全長は約 1.5km ある。

現在『本町排水』と名前がある同川は、国道までの約 50mが明渠となっているものの、荒れるにまかせた状態となっている。さらに上流部は民家が押し寄せてきたため、川の形状すらはっきりしない有様である。水の落ち口となった市道手稲本通線で左右に分かれ、新栄町内会側は廃止に、光星町内会では歩道の下に隠れ、ライラック町内会では明渠になっている。

歴史史跡標第 2 号建つ

こうした言い伝えを大事にしようと、稲穂金山活性化推進委員会では平成 14 年３月、稲穂２条１丁目５に 高さ 1.4mのステンレス製の歴史史跡標『手掘りの小川』を建てた。碑文は委員会で協議して焼き込んだ。小川は宮崎家の前に落ち口がある設計となっていたため、先の古文書の上書きは「前ノ河」になったものと推測される。

史跡標の取材風景（平成 14 年）

稲穂では『稲穂神社』に次ぐ史跡標第２号である。碑が建った当時は新聞に報道されたこともあり、見知らぬ人が次々訪れていたものだが、最近は興味を寄せる人もなく、ひっそりと静まり返っている。

木箱の中は、精査すると興味深い資料がまだまだ沢山残されており、稲穂金山活性化推進委員会に関心がないようならば、そっくり手稲郷土史研究会に寄贈してもいいと考えている。

次回予定 ⇒ さっぽろ銭湯物語／塚田敏信氏（まち文化研究所 主宰）／8 月 14 日（水）18:15～／区民センター 視聴覚室

◆◆◆◆◆◆◆

富丘小学校より借用の史料

★富丘小学校所蔵の郷土史料を展示　手稲区役所１階の「手稲歴史資料展示コーナー」のガラスケース内に７月より、富丘小学校（富丘１条６丁目）の『開拓のへや』からお借りした、蹄鉄など 10 点ほどの史料を展示しています。手稲郷土史研究会が制作協力した「手稲開基となった仙台藩白石城 片倉小十郎家臣団の入植」のパネルと併せて、ぜひご覧ください。